

第27回医療体育研究会/第10回アジア障害者体育・スポーツ学会日本部会 第8回合同大会 抄録集

体力・活動レベルと運動に対する姿勢は③運動実施に対する考え(こだわり)等を考慮しながら、丁寧にプログラムを進めれば楽しく体を動かすことに興味が出て来ます。記憶の一つ、手続き記憶は「やり方の知識」Knowing Howの獲得を可能にし、反復訓練によって獲得される技能や習慣が含まれ、運動性記憶(運動感覚的記憶)として手足の動きに注意しながら技能を遂行し情報を得ている。一旦獲得した技術は記憶低下があっても障害を受けない事が多い。運動前に血圧・体温・心拍数、本人の自覚、家族からの情報、日頃からの様子。変化あれば中止する、予期せぬ事態が起きてもいつでも対処できるように。運動中の雰囲気づくり、信頼関係、またやってみてみたい気になるように。運動プログラム実践①空間物(ボール・シャトル・ディスク・お手玉等)に対する、恐怖心を抱かせないように運動動作に慣れるまでは、優しく・丁寧に・貴重なものを扱うようにやり取りする②障害特性をよく理解する、見えにくさ、聞こえにくさ、失読、失行、失調、コミュニケーション、麻痺上肢に対する回復期待感の取り組み。まとめ：①現在の制度の中では体育活動はレクリエーションあるいはグループ活動が考えられる。②体育活動実施で専用訓練室でない限り場所の共有であるのでスタッフ一人ひとりが運動の必要性を理解する。③体育種目活動は比較的ダイナミックな運動参加により、隠れていた機能(機能的予備能力)が使われ、全体としてのCAPACITYが増大する。④利用者さんが運動に慣れるまでは、とにかく安全にリラックスでき、丁寧に個人個人のペースを大切にします。

デフラグビー10年の歩み

～日本聴覚障害者ラグビー活動報告～

- 小中 一輝、長田 耕治(日本聴覚障害者ラグビー連盟)
 落合 孝幸(日本聴覚障害者ラグビー連盟会長)
 金子 香織(日本聴覚障害者ラグビー連盟、
 放送大学大学院文化科学研究科)

【はじめに】

デフラグビー(聴覚障害者ラグビー)は1990年頃からニュージーランドで盛んになり、1994年に日本でも活動が開始されている。国際交流の規則では、両耳の平均聴力が25デシベル以上であるが、国内交流の場では特に取り決めは無く、「聴覚に障害を持つ者」となっている。他のデフスポーツと違って、難聴者とうろう者が混在するのが特徴であり、コミュニケーション手段は手話のみではなく、口話、筆談と多岐にわたる。ラグビーは様々な競技の中でも身体接触が許されるハードなスポーツであり、後方にしかパスが出来ず、密集プレーが多くて互いの顔が見えにくいことから、「声」でのコミュニケーションが重要とされ、聴覚障害者が不利になる場合が多く、聴覚障害者の間で行う人は少ない中で活動している。今回の報告では日本におけるデフラグビーの活動の歴史と、今後の課題について述べる。

【日本のデフラグビーの歴史】

- 1995年 初の合同練習を目的とした全国交流会を開始した。
 1997年 日本聴覚障害者ラグビークラブ設立。
 2002年 日本ラグビー協会の全面的な援助の下、第1回デフラグビー世界大会参加(ニュージーランド)。7人制の部で準優勝。
 2005年 日本聴覚障害者ラグビークラブとして単独の英国遠征実施。
 2006年 日本聴覚障害者ラグビー連盟と改名。

【今後の課題】

- ①競技人口について
 ②聾者、難聴者、健聴者と共に競技をすることの難しさ

身体障害者の総合格闘技活動について

中島 史朗(広島大学大学院)

最近テレビにおいて、格闘技の大会が放映されている。それに伴い、障害者が格闘技に関心を持ち、活動を始めたいという人々も増えている。しかし、格闘技は、危険・指導法がわからないという理由から受け入れ先が少ないことも事実である。ここでは、一般の格闘技ジムで活動している身体障害者の番組を紹介する。

身体障害者における総合格闘技の活動方法は、肢体不自由、視覚障害聴覚言語障害などのそれぞれの障害を有していても、何ら健常者と変わるところはない。本人にとっても、格闘技は力比べをする人間の本能に基づく身体活動であり、打撃、投げ技、固め技、関節技があるが、個々にある障害の種類や程度に応じた工夫は必要である。

障害によっては運動能力としての四肢、体幹の維持・安定性、スピードなどに問題がある。運動器官の変形、拘縮、短縮、異常可動性、動揺関節、欠損などの部分的な異常も認められる。そのために、サポーター、装具、テーピング等の工夫が必要である。例えば受け身に関しては、習得に多少時間はかかるとしても、無理なく反射動作として身につく練習で発揮できる。身体障害者においては、その障害の部位・程度によって違った指導法がある。しかしながら、身体障害者への指導法の体系化はまだ確立されていない。

障害者を、実際に受け入れ指導しながら試行錯誤するのが解決法として有効であると考え。「あれができる、これができる」という姿勢で、常に個別に見ることである。個別に見るという点では、基本的に健常者と同様に各自に工夫を促すことが重要である。また障害者自身も、与えられた課題に対して、真剣に練習することが大切である。試合においては、個々の障害に応じたルールやスポーツ用具を整備することで可能である。このような環境が揃えば、格闘技であっても危険ではなく楽しめるスポーツとして位置づけられる。障害者スポーツ活動の選択肢として格闘技も検討する必要があるのではないだろうか。

知的障害者における川でのグループアクティビティー

- 越智 和枝、小原 早苗、長谷川みどり
 (YMCA健康福祉専門学校)
 渋谷 公一、小野 晃(YMCA福祉スポーツ研究所)

【目的】本研究の目的は、知的障害者による川でのグループアクティビティーを集団援助技術の視点から検討することであった。

【方法】対象者は、知的障害者13名とスタッフ11名の計24名で行った。実践場所として神奈川県中津川、プログラム構成は知的障害者、スタッフ24名を二つのグループに分け、全8種目を1種目ごとに点数をつけて勝敗を競った。主観的評価の方法として知的障害者の理解援助の為にピクトグラム(三段階の主観的評価：満足ならニコニコマークを選ばせる)を用いて「満足・普通・不満足」の3段階で主観的評価を実施した。

【結果・考察】主観的評価の結果から、三人以上のケースは二人で行うものに比較して満足度が低い傾向であった。この原因は、複数になるほど他者への依存度が高くなり、主体性が薄れたと考えられる。プログラム中の様子からも対象者の自発的な行動や発声が見られ、自然に様々な感情を表に出すなど、楽しさや満足感・積極性が出る場面が多々みられた。川でのアクティビティーは集団生活が苦手な対象者の興味、関心を引きやすく、対象者の相互作用により個々に何らかの刺激を与えることで内的動機を高めやすく、プログラムへの参加を導きやすいと考えられる。さらに、集団援助技術の技法を応用することも可能であることが示唆された。